窺はれる。委曲を盡せる叙事、典雅な文章も、この地理書の構造のために一層輝きをみせてゐる。

道元は情理兼備へ、清濁併呑む底の人ではなかつた。どこまでも理の人であり、清の人であつた。魏書は彼の傳を酷吏傳に列してゐる。磯史とまで稱せられる魏書であるから、それによつて彼を酷吏と評することは不當ではあらうが、執法清列、爲政嚴猛であつたことは事實であらう。この純清な理知的な性格は彼の官吏生活を決して幸福にはしなかつた。終にそれが禍して陰盤驛に於て凄愴な臨終を遂げたのである。しかしその地理學に於てはこの清理の性格が見事に結實して獨立不羈の存在たらしめたのである。

參考文獻

趙一清、北史本傳釋（水經注釋卷首）
山丁、酈學考叙目（中央研究院歷史語言研究所集刊三本三分）
趙貞信、酈道元之生卒年考（禹貢半月刊三周年記念號）
（昭和十六年二月二十五日稿）

關老爺

京都の東山の極樂寺、といつても知つてゐる人は多くあるまい、その代り眞如堂のことだといへば何のことだと頷づく人は少くないだらう。その表門通りの北に四つ程寺が並んでゐる。四つとも丁度同じ位の大きさをしてゐるものだから俗に四軒寺とも呼んでゐる。その中の何番目だつたか忘れたが東北院といふ寺に關帝廟があるのだ。この寺は境内に萩が多く秋には美しい花が庭一面に咲くので萩の寺ともいはれるところだと思つてゐる。たしか雍州府志であつたと思ふが、東北院に關白道長公の木像ありとして、この寺と道長との關係を隨分長く說明してあつたのを讀んだことがある。恐らくさういつた關係は事實あつたのであらう。しかし現に寺には關羽の像をまつつた一棟の建物があつて他に道長の像らしいものもないから、雍州府志の記事は必ず關帝に關白道長をこぢつけたものた違ひない。實は殘念ながら私はまだその東北院の關帝像を拜見したことがないので何ともいへないが、柱にかゝつた煤ぐろい關帝云々とあつた表札からみて、きつとあの恐い顏をして黑い髯を垂らした關老爺であらうと思つた。寺の人にきくと十一月のいつとかに一度御開帳があるとのことであつた。

支那ではあんなに何處にでもあつて、民衆に親しまれてゐる關老爺が、たま〳〵珍らしくも京都に來られると、御堂關白となりすまし年に一度しか顏をお見せにならないのかと思ふと、何となく苦笑を禁じ得ないではないか。この間老爺廟の抑々の本家本元である山西解州の關帝廟へ行つてこんなことを思ひ出した。

（日比野）